

クワイディティスティックなクオリア

前田高弘
大阪大学

クオリアを物理的世界の中に位置づけることが困難な課題であるように見えるとすれば(実際そのように多くの人々には見えているのだが)、その主な要因の一つとして考えられるのは、クオリアが本質的に何らかの内在的性質として捉えられており(何の内在的性質であれ)、そのためにクオリアが因果・機能的役割によっては捉えきれない側面を持つように見える、ということである。本発表では、その辺りの事情について、性質一般にまつわる特定の形而上学的問題の観点から再考してみたい。

性質一般にまつわる特定の形而上学的問題とは、性質と、その性質が寄与する(と考えられる)因果的効力との関係に関するものである。その関係についての見解は大まかに(ここでの関心に従えば)三つに分けられる。一つは **Armstrong** や **Lewis** に代表されるものであり、それによると、性質と因果的効力は本性上互いに独立しており、どの性質がどの因果的効力に寄与するかは可能世界によって異なりうる(自然法則は形而上学的に偶然的)。もう一つは **Shoemaker** や **Swyer** に代表されるものであり、それによると、性質はその本性上それが寄与する因果的効力によって尽くされるのであり、それゆえ性質が別の可能世界では別の因果的効力に寄与するということはない(自然法則は形而上学的に必然的)。さらにもう一つは **Martin** や **Heil** に代表されるものであり、それによると、性質はそれが寄与する因果的効力によってその本性が規定されるが、その本性はその因果的効力によって尽くされない質的な側面も持っている(やはり自然法則は形而上学的に必然的)。

そこで、クオリアとの関連で重要になる争点は、性質に内在的本性(**quiddity** : 法則的に異なる可能世界を通じて同一であるような本質)のようなものを認めるか否かである。もしそれを認めるならば、クオリアの問題は性質一般の問題に回収される可能性が出てくる。逆にもしそれを認めないならば、クオリアの問題は、まさにクオリアが性質一般の在り方から外れている(ように見える)ために生じると解釈することができる。だがいずれにせよ、クオリアの問題は、それぞれの立場にとってそれぞれの仕方でネックになると考えられる(その一例として **Shoemaker** の議論を取り上げる)。本発表ではそのことについて論じたい。